北海道新聞　令和元年8月3日（朝刊・小樽後志版/17面）

小樽港あす開港120周年

海運から観光へ

クルーズ船誘致 整備急ぐ

小樽港は4日、1899年（明治32年）の開港から120周年を迎える。道央の産炭地から鉄道で運ばれる石炭の積み出しなど道内物流の要衝として発展した同港。しかし近年は産業構造の転換や他港との競合で貨物取扱量が減少し、海運拠点としての地位は低下傾向にある。一方で港湾管理者の市はクルーズ船誘致などに力を入れ、港を観光と街づくりの新たな核と位置づける次代への発展を見据えている。

（谷本雄也）

小樽港の全景（2017年7月、小樽開建撮影）と小樽港第3号埠頭に停泊するクルーズ船＝18年9月

貨物取扱量は直近の2017年は1172万トンで、ピークの1998年（2539万トン）の半分以下となり道内の港で5位。80～90年代に対ロシアの魚介類や中古車の輸出入に支えられた外国貿易額は99年、小樽港を補完する目的で82年にできた石狩湾新港に抜かれるなど低迷が続く。

一方、今年のクルーズ船の寄港は昨年より延べ8隻多い29隻を予定。観光名所の小樽運河まで徒歩圏内の3号埠頭への着岸が増えれば経済波及効果が見込めるため、小樽開建は同埠頭を水深9メートルから10メートルに掘り下げる工事を3～4年後の供用開始に向け進めている。

現在、3号埠頭は10万トン級の大型クルーズ船の着岸に必要な水深がなく、約3キロ離れた勝納埠頭に回さざるを得ないためだ。

市は小樽港整備の長期構想の検討委員会を今秋にも約2年ぶりに再開する。国土交通省認定「みなとオアシス」の20年度登録に向け、旅客ターミナルや物販店など構成施設の概要を固める。

6月には市が小樽商工会議所などと連絡会議を立ち上げ、3号埠頭周辺整備への課題の協議を始めた。市港湾室は「民間と連携を深め、港をにぎわいある空間にしたい」としている。

小樽港の歴史

1872年（明治5年）	小樽・色内に石造埠頭を築造、翌年完成
80年（同13年）	小樽・手宮―札幌間に道内初、国内3番目の鉄道が開業
97年（同30年）	小樽築港第1期工事（北防波堤）始まる。1908年完成
99年（同32年）	8月4日に外国貿易港に指定。「開港」と位置づけ
1905年（同38年）	小樽―大泊（コルサコフ）間に樺太定期航路就航
08年（同41年）	小樽築港第2期工事（南防波堤など）始まる。21年完成
35年（昭和10年）	1号埠頭の建設に着手
51年	国の重要港湾に指定
58年	外国定期貨物航路が道内最多の22航路に
70年	舞鶴、敦賀フェリー航路開設。74年に新潟も
90年	小樽港マリーナ開業
95年	日ロ定期フェリーが就航。97年から運休
98年	外国貿易船入港3万隻を達成。取り扱い貨物がピークに
2002年	中国定期コンテナ航路開設。敦賀航路休止
11年	日本海拠点港（外航クルーズ）に指定
13年	ロシア・ウラジオストク定期貨物航路開設
14年	小樽市が第3号埠頭及び周辺再開発計画を策定
16年	小樽市「小樽港長期構想検討委員会」が初会合
17年	市が港湾計画改訂作業を中断、長期構想検討委も議論進められず
18年	小樽市などが北前船寄港地として日本遺産認定
19年5月	小樽市などが「炭鉄港」として日本遺産認定
秋以降	長期構想検討委が再開？
20年度	港湾計画改訂、国交省「みなとオアシス」登録？

「コト消費」発想を

小樽商大 李濟民教授

開港から120年の歴史を刻んだ小樽港の将来像について、小樽市の小樽港長期構想検討委員会委員の李濟民・小樽商大教授に聞いた。

◇

小樽の街と産業は港を拠点に形作られてきた。港が果たしてきた歴史的役割を今日的にどう生かすか、真剣に考える必要がある。

小樽港の優位性は中国東北部やロシアに近いこと。これらの地域にモノを運ぶ役割は将来も果たせる。東京にラブコールを送っても、東京は北海道を見てくれない。他国の市場とつながっていくべきだ。

課題は積み荷の確保。小樽や道内で全て生産するのは難しく、かつての北前船のように他港と航路でつながり、中継地点として機能を高めていく余地もある。

もう一つの可能性はインバウンド（訪日客）だ。今、観光客の流れは運河止まりで海側に流れていない。世界の港湾都市は港を重要な観光コンテンツと位置づけるが小樽は活用していない。海から見る小樽の街は素晴らしい観光資源。築港地区から運河方面へ水上バスを走らせるのもいい。

港湾整備は岸壁や箱物などハード面も重要だが、過ごす時間や経験など「コト消費」の舞台とする発想が不可欠。規制で利活用が進まないのは行政の責任だが、民間から行動を起こす方が近道ではないか。

小樽では約20年前、一部入浴施設が外国人を拒否して議論を呼んだが、その後も港町本来の多様性が失われてきたように見える。明治期のフロンティア精神を取り戻し、大企業が手を出せない隙間（ニッチ）にビジネスチャンスを見いだす小樽発の動きに期待したい。（聞き手・西依一憲）

リー・ジェミン　1957年韓国・ソウル生まれ、延世大卒。85年に小樽商科大大学院修士課程修了。89年同大講師に着任し以後、小樽で暮らす。97年教授。同大グローカル戦略推進センター産学官連携推進部門長。専門は経営学